



ぜんこくのうみやうきょうどうくみ あいちゅうおうかいちようしやう
全国農業協同組合中央会会長賞

爆弾おにぎり

あきたけんたいせんしりつおおまがり
秋田県大仙市立大曲中学校二年

くす まき か れん
葛巻 華蓮

私の家には、「爆弾おにぎり」というメニューがあります。これは、私が小学校のときに母が考えたものです。私の両親は共働きで休日の昼食は母が作ってくれるお弁当でした。しかし、仕事が忙しくなり、母はお弁当を作る時間すら無くなってしまいました。そこでお弁当の具材をご飯で包むだけという、この簡単なメニューを考えました。

しかし、母にとっては簡単で手間ははぶける爆弾おにぎりですが、私にとっては大嫌いなメニューでした。学校で家庭科の授業のときなどに休日の昼食に何を食べたか聞かれたりしても、恥ずかしくて嘘をついてしまうほどでした。友達の家では、手の込んだ家庭料理なのに私の家だけどうして爆弾おにぎりなんだろうと、不満に思っていました。そんな爆弾おにぎりを、弟が児童館へ持って行くようになりました。それすらも、私にとってはすごく恥ずかしいことでした。クラスの人々には、絶対に知られたくないと思っていました。母が忙しいので、代わりに私が弟のことを児童館へ迎えに行った際に、帰り道でついに私は聞いてみました。

「そんなおにぎり持って行って、恥ずかしくないの？」

「別に恥ずかしくないよ。おいしいし。」

弟の返答は、私が想像していたのとは全く違いました。すごく驚いたし、衝撃を受けました。そして、その時、一瞬だけ弟がとても大きく感じました。私はずっと、周りの目や見た目ばかりを気にしていました。こんなおにぎりなんて、ダサイとか嫌だとか、格好悪いとか、本当はそんなのは関係なかったということに、その時ようやく気がつきました。おに

ぎりも、れつきとした家庭料理ではないですか。母の愛情が詰まっているではないですか。よく考えてみれば、インスタントラーメンに頼らずに、母は私たちのために僅かな時間を使って爆弾おにぎりを作ってくれていたのです。それを恥ずかしいと言っていた自分が恥ずかしいと思いました。私はあの日以来、爆弾おにぎりが大好きになりました。おいしい、母の家庭料理です。今となってみれば、あの頃はこうしてあんなに恥ずかしかつたのか、不思議に思うくらいです。最近では、休日の昼食に爆弾おにぎりは出ていません。でも、私にとってはいつまでも大好きな、愛の詰まった思い出のおにぎりになりました。

昨年三月十一日、東日本大震災がありました。この地震で、たくさんの方が亡くなられました。また、東北地方は大きな被害を受けました。実は、その時私は宮城県に在住していました。内陸だったため、幸い津波の被害はありませんでした。しかし、水道も、電気も、ガスも、一週間止まったままでした。そんな中、食べられるのは残り物やインスタント食品ばかりでした。やっと復旧したときに食べた、温かいご飯はとてもおいしく感じたのを覚えています。今、ご飯をお腹一杯食べられるということがどれだけ幸せなことなのか、痛感させられます。

世界では、貧しくてご飯もろくに食べられない人がたくさんいます。私たちよりも小さな子供が、働いて生活しています。そう考えてみると、偶然日本に生まれた私は、安全な場所でおいしいご飯を食べることができます。だからこそ、見た目を気にするなど、そちらの方が恥ずかしいと思いました。

日本人は、感謝の気持ちを持てるからこそ「いただきます」という挨拶があるのだと思います。だから、その感謝の気持ちを伝えるためにも、しっかりといただきますと心から言いたいです。

私は、爆弾おにぎりのおかげで、大切なことを学ぶことができました。このメニューを考えてくれた母に、感謝したいです。そして、私がお母さんになったときに、この大好きな爆弾おにぎりを作ってあげたいと思います。